

# 製作コーナーを基盤にした4歳児保育の 意義とその実践

—同調的な遊びから目的志向的な遊びへの発展に向けた援助—

Meaning of Early Childhood Education and Care

to Have Thought Much of the Making Corner in the 4-Year-Old Class

—Guidance for Development of Purposeful Play from Sympathetic Play—

高橋 健介\* 中山 昌樹\*\* 中田 幸子\*\* 猪越 恵美\*\*\*

Kensuke Takahashi, Masaki Nakayama, Sachiko Nakada, Megumi Inokoshi

## 要旨

本研究の対象となる認定こども園4歳児クラスでは、その後半期の遊び場面において、仲間との同調的な遊びから仲間との目的志向的な遊びへと発展させていくことを実践課題としている。そこで本研究では、製作コーナーを基盤にした4歳児クラスの保育実践およびその観察記録から、保育環境としての製作コーナーの意義やその援助のあり方を検討した。

その結果、保育者は製作コーナーの壁側から各拠点での幼児の遊びの状態を見取っていること、さらにその見取りによって援助のタイミングを計っていることが考えられた。また、仲間と共有されつつあった遊びの目的やイメージが不確かになった時に、保育者の目的やイメージを改めて確認するような言葉がけによって、幼児達は志向する遊びの目的やイメージを確認しており、そのことによって、作り見立てによる継続した活動が展開され、仲間との目的志向的な遊びに向けた遊びに発展していくことが考えられたのである。

キーワード：製作コーナー 4歳児保育 同調的な遊び 目的志向的な遊び

## 1. はじめに

本研究の対象となる認定こども園A幼稚園4歳児クラスでは、製作コーナーを基盤にした遊び保育を実践している。保育室には製作コーナー、積み木コーナー、ままごとコーナーを常設し、担任保育者は登園後の遊びの時間（1時間半～2時間程）にはなるべく製作コーナーの壁側に座り、クラスの幼児達の遊びの動機や観察学習の対象となるような作業（遊び）モデルを提示している。あわせて、その場から製作コーナーや他の場にいるクラスの幼児全体を見取り、必要な際にその場に行って援助

---

\*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo University, Faculty of Human Life Design  
住所：〒351-8510 朝霞市岡48-1（東洋大学）

\*\*認定こども園あかみ幼稚園

\*\*\*元認定こども園あかみ幼稚園

をおこなっている<sup>1)</sup>。

これまでに取り組んできた2歳児クラスおよび3歳児クラスでの実践研究<sup>2) 3)</sup>では、製作コーナーでの保育者の作業(遊び)モデルによって、保育者と幼児との製作活動の作業(素材や道具を用いた手の動き)による動作共有を伴う同調関係が築かれていくことが明らかになった。製作コーナーでのこの同調関係によって、クラスの幼児達、特に遊びや居場所が定まっていない幼児達が製作コーナーを安定した居場所とすることが考えられた。さらに、この同調関係を基盤に、保育者と幼児、幼児同士の間にも「見る-見られる」関係が築かれ、互いに学びあいながらさらに遊びを展開することが考えられた。

4歳児クラスの保育実践では、特に製作コーナーを基盤にした遊び保育によって、これまでに培ってきた同調関係、「見る-見られる」関係をベースに仲間と遊びの目的を共有し、その目的を志向する遊びに徐々に発展させていくことを実践課題としている。そこで本研究では、4歳児クラスの保育実践、特にその後半期の実践において、幼児達の遊びが仲間との同調的な遊びから目的志向的な遊びに発展していくための援助のあり方について、製作コーナーを基盤とした遊び保育の実践およびその記録を通して検討したいと考える。

## 2. 4歳児保育の遊びにおける仲間との目的志向的な遊びとその援助について

無藤(2011)<sup>4)</sup>は、就学前3年間の幼児期の仲間関係において、「親密性」を育て、それをベースにさらに「目的志向性」を育てることが、幼児教育の重要なポイントと論じている。また、4歳児の「目的志向性」を伴うような遊びについて、以下のように述べている。

4歳後半になると、協同関係が生まれてきます。つまり、一緒になって何か1つのことをやり始めたり、目の前のことから思い付いて協力して進める。「何か一緒にやりたい」といった、共通の願いが生まれる。そのように漠然としたものを「願い」と呼んでいるのですが、それが具体的な、実現したい「目的」になっていく。何となくおうちを作りたいというのではなく、3階建てにして、いちばん上は寝室にしようとか、かなり具体的なものになっていく。そういう目的になってくると、そのためには1階はこうしてここに階段にしようなど、全体像のイメージができて、そこから細かいことを考えていくということになります。

ここで無藤は、4歳児の後半期には情緒的な側面の強い「親密性」による人間関係から、それをベースに「目的志向性」が育ち、それを伴った人間関係にすすんでいくと説いている。つまり、4歳児保育においては、一緒にいることで心地よい、楽しいといった「親密性」による関係、すなわち場やコト(身体の動き)を共有するような仲間との同調的な遊びから、仲間と先の見通しを共有するような目的志向的な遊びへと徐々に発展させていくことが大きな実践課題と捉えることができる。

友定(2012)<sup>5)</sup>においても、現行の幼稚園教育要領において、その領域「人間関係」のねらいに「身近な人と親しみ、かかわりを深め」ることが示され、「協同して遊ぶ」ことが新たな内容として加えられたことを鑑み、幼児期に協同して遊ぶ経験を、「共通の目的を見だし、工夫したり協力したり

などして協同して遊ぶ経験の中で、幼児は人とかかわる力を深めていくだけではなく、後に集団で学び合う関係の形成につながる基礎部分を体験している」と位置づけている。さらに、幼児期に目的を共有し、協同して遊ぶことが、その後の集団での学び合い、小学校教育での学びの基盤となるとし、その重要性を論じている。一方で、4歳児クラスの幼児達が協同して遊ぶことの難しさについて、「年少児や年中児では、年長児のような共通の目的を共有することはまだまだ難しい。(中略)活動に必要となることがらに持続的に向かったり、自分のやりたいことを我慢したりするなど、自律的になっていくことは難しい」と論じている。確かに、4歳児クラスの幼児が仲間と遊びの目的や先の見通しを共有し、それに向かって遊びを持続的に展開することは困難なことが考えられる。しかしながら、5歳児クラスでの豊かな協同的な遊びの実践につなげていくためにも、特に4歳児の後半期には、徐々に仲間との同調的な遊びから目的志向的な遊びへと展開していくことは必要なことであろう。このような目的志向的な遊びへの発展に導くためにも4歳児保育における保育者の援助方法を構築していくことが重要な課題と考える。

中坪・岡花・古賀(2010)<sup>6)</sup>の実践研究においても、幼児達が遊びの目的を共有するような「協同遊び」を「コミュニケーションの促進や人間関係の形成に寄与するとともに、共通の目的を達成するための話し合い、協力、自己主張、葛藤、妥協(折り合い)、試行錯誤、工夫など様々な能力を必要とする」遊びと捉え、「協同遊び」を発展させることが保育者の援助行為における専門性として重要な役割と位置づける。さらに、4歳児保育(11月~12月)のビデオ記録、その場面に対する保育者の語りの分析から、4歳児の「協同遊び」に対する保育者の実践的思考について以下のように論じている。

4歳児の協同遊びに関して保育者は、【遊びの偶然性】に着目していた。4歳児の場合、協同遊びが発展せずに収束したり、持続しなかったりすることも多くある。保育者は、それを失敗と捉えるのではなく、明日の保育の【布石】として捉えることで、その中で多様な可能性を見出していた。そこには【遊びの偶然性】としての協同遊びの発展だけではない、先の見通した保育への思考を見出すことができる。

この研究からも、4歳児保育において、保育者は仲間との目的を共有し展開するような目的志向的な遊び(「協同遊び」)を保育のねらいとして持ちながらも、その時々幼児の姿(個々のイメージや志向、偶然性におこった事柄等)を状況に応じて優先し、意図していた仲間との目的志向的な遊びへの発展に向けた援助に固執していないことが理解できる。一方で、4歳児保育においては、保育者が仲間との目的志向的な遊びに向けて先々を見通しながら構想し援助していくことの必要性も考えられるのである。

その意味では、4歳児保育の遊び場面では保育者がそれぞれの遊びの状況を把握し、その後の展開を構想するためにも、なるべくクラスの幼児全体を継続的に見取り、個々や群れでの遊びの状態を見取ることのできる状況性をまずは構築することが必要と考える。さらに、見取った遊びの状態によっては、適時に目的志向的な遊びへと展開できるような直接的な援助が必要と考える。クラス全体への見取りと適時に必要とされる機会での直接的な援助、この両面の援助行為を同時的に可能にするのが製作コーナーを基盤とした遊び保育であると考えられる。なぜならば、製作コーナーを基盤にした遊び保

育では、幼児それぞれが選択する場やモノを用いて遊ぶことが保障されており、そのような多様な遊びの状況においても保育者が製作コーナーの壁側からクラスの幼児全体を継続的に見取ることを可能にしているからである。さらに、製作コーナーからの見取りは、少し引いた場から冷静に見取ることができるので、遊びの状態の診断による適時な援助を可能とすることが考えられるのである。

### 3. 認定こども園A幼稚園の4歳児保育における製作コーナーとその実践

#### (1) 4歳児クラスの概要と保育環境としての製作コーナー

対象となる認定こども園A幼稚園4歳児クラス(担任保育者1名、幼児29名)では、保育室に製作コーナーが常設され、その他にも、ままごとコーナー、積み木コーナーが常設されている。本クラスの担任保育者は、登園後の遊びの時間に、製作コーナーの壁側の場所をベースにして、その場になるべく座り、幼児を引きつけ、遊びの動機となるような作業(遊び)モデルを提示している。クラスの幼児にとっても、この場に担任保育者がいることで、保育室のどの場においても、担任保育者が見えやすい状況となっている。こうして保育者と幼児達との間に、互いに“見る-見られる”関係が築かれることで、幼児は、製作コーナーを中心に、保育室内に安定した居場所をもちやすくなる。また、4歳児クラスの実践の最中では積み木コーナー、ままごとコーナー、広場(自由に使えるスペース)に仲間と遊びの拠点をつくり、その場で継続して遊びを展開する幼児達も見られる。保育者は、このように製作コーナー以外の場にいる幼児や居場所の安定しない幼児に対しても製作コーナーからクラスの幼児全体を見取り、必要な際に援助をおこなうようにしている。

#### (2) 観察および記録の方法

認定こども園4歳児クラスにおいて、登園後から10時45分頃までの遊びの時間に、担任保育者を主に、クラスの幼児の観察をおこなった。観察では、観察者がビデオカメラを持ち、製作コーナーを中心に、なるべく保育室全体が視野に入るよう撮影した。その音声については、ワイヤレスマイク(SONY製ECM-HW2)を、担任保育者の腕に装着し、担任保育者とその周辺の幼児の言葉を撮影した動画記録に収録した。さらに、観察(ビデオ記録)の1~2週間後に、担任保育者、4歳児の主任保育者、主任保育者、副園長、観察者が、記録したビデオを約30分間視聴した。その後、担任保育者からこの日までや、記録された場面での幼児の見取り、援助の意図等について、聞き取りをおこなった。また、参加者全員で幼児の見取りや今後の実践について、話し合いをおこなった。なお、観察対象の概要は以下のとおりである。

○対象園：栃木県S市認定こども園A幼稚園

○対象クラス：4歳児クラスC組(担任保育者1名、幼児29名)

※2012年7月から2013年3月までに、対象となる4歳児クラスでの観察を月に1回のペースで計8回おこなった。



### (3) ビデオ記録にワイヤレスマイク付きビデオを用いることについて

本実践研究では、そのビデオ記録の音声を収録するにあたって、新たにワイヤレスマイク（SONY製ECM-HW2）を用いることにした。このワイヤレスマイクとは、そのレシーバーをビデオカメラに装着できる機器である。ワイヤレスマイクから収録される音声をビデオカメラで収録される動画と同期して記録することが可能である。このようなワイヤレスマイク付きビデオカメラを本実践研究において用いることになった経緯は以下のとおりである。

これまでの2歳児クラスや3歳児クラスでの実践研究においてもその記録方法として、ビデオカメラを用い、担任保育者を中心になるべくクラスの幼児全体が視野に入るよう撮影した。このような撮影・記録方法では、遊び場面において、保育者と幼児、幼児同士の言葉のやりとり（音声）がビデオカメラのマイクと距離があるため収録しづらいことが多かった。よって、これまでの実践研究では、保育者のモデル性や、見取りと援助のタイミングとの関係を中心に分析をおこなってきた。しかし、4歳児クラスでの実践研究では、遊びの発展を促す保育者の援助には、保育者の言葉による援助やその応答も重要な要因となることが予測された。よって、これまでのビデオカメラによる記録方法では大きな課題があった。

その一方で、ビデオカメラで鮮明な音声を収録するためにはある程度その対象（保育者とその近くにいる幼児）に近づいて撮影する方法が考えられる。このような保育者とある特定の幼児との関係を記録し検討する研究手法について岩田（2011）<sup>7)</sup>は、「フィールドとしての保育現場は、集団としての現象であり、（中略）フィールド（現場）という以上、状況性から個人に関心を特化することは恣意的にはできないはずである」と指摘する。さらに小川（2013）<sup>8)</sup>においても、保育の中での遊びを理解するための記録の条件の一つとして、「保育者の位置や動きは、幼児の動きとともに援助行為に入る入らないにかかわらず、フィールドワークにおける観察対象となる。なぜなら、遊び場のフィールド内在者としての『保育者』は、幼児全員との関係性の中に包摂されているからである」と論じている。このようなことから保育の場での幼児個々の言動は、保育者を含む（保育者の意図も含む）集団のあり様から何らかの影響を受けていることが考えられる。よって、集団保育を対象とする実践研究では、ある個や群れの姿、それに対する援助のあり方を検討するにしても、あわせて保育者を含むクラス集団を記録することが必要と考える。

これらのことから4歳児保育を対象とした本実践研究では、そのビデオ記録に、クラスの幼児全体を離れた場から俯瞰して撮影することと、保育者およびその周辺の幼児の言葉のやりとり（音声）をより鮮明に収録することが可能なワイヤレスマイ

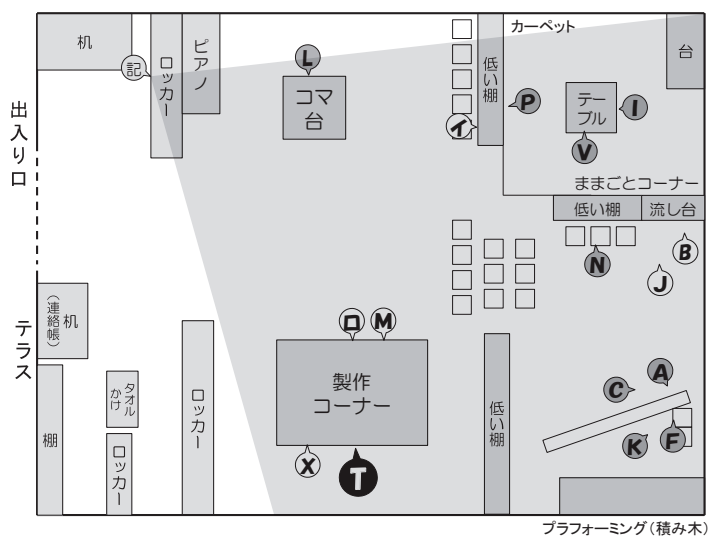


図1：本実践研究のビデオ記録におけるある場面でのビデオの視野

ク付きビデオを用いることにした。このことによって保育者が離れた場所（製作コーナーなど）から各コーナーの幼児達をどのように見て（俯瞰し）、その上で、どのようなタイミングで個々の幼児や群れにかかわったかを記録することが可能となった。さらに、保育室全体をなるべくビデオの視野に入れた撮影、つまり距離のある場所からの撮影でも、保育者の言葉がけやその応答を音声を含めて記録することが可能となった。合わせて、その際に周辺にいる幼児達の姿を同時に記録することが可能となったのである。

#### (4) 記録と考察

##### 1) 記録

本稿では、2013年3月7日（木）のままごとコーナーおよび製作コーナーでの幼児の遊びと担任保育者の援助についての観察記録を中心に検討をおこなう。本記録を検討の対象としたのは、まずは、認定こども園A幼稚園4歳児クラスの教育課程において、2・3月（Ⅵ期）の保育内容（育ちの詳細）の一つに「少し先を見通しながら目的を持った活動を友達と行うようになり、仲間の存在がますます重要になる」ことがあり、この時期の実践においても、仲間との目的志向的な遊びに向けた保育（援助）が展開されると考えられる。さらにこの時期は、製作コーナーでの幼児達の作業（遊び）が安定してきていることから、担任保育者が製作コーナー以外の場にいる幼児達に対し、仲間との遊びが展開できるよう必要な際に援助をおこなう姿が多く見られるようになってくると考えたからである。

##### 2) 2013年3月までの観察で見られた製作コーナーおよびその他の場での保育者の援助について

2012年7月、9月の登園後の遊び時間の観察では、4歳児クラスの幼児達の一部は、固定化されつつある仲間とままごとコーナーや積み木コーナー等で集い、それぞれが同じように料理を作るふりをしたり、大型積み木で作った飛行機等に乗って遊ぶなど、場や動きを共有して同調的に遊ぶ姿がみられた。ただし、それぞれの集団がそれらの遊びを自ら活発に展開させるような姿は少なかった。一方で、この時点では、遊びが定まらず、仲間との遊びを展開できない幼児もクラスに複数いた。このような状況に対し、担任保育者は、製作コーナーに座り、手の動きをともなう作業モデルの提示を重点的におこなっていた。これによって未だ不安定であった幼児達が、担任保育者と動作を共有することで、安定して遊びを継続する姿があった。このことについて、聞き取りのなかで担任保育者は、各コーナーで遊ぶ幼児にかかわって援助することも必要だが、まずは未だ不安定な幼児達が、製作コーナーでの同調的な作業によって、安定した居場所をもてるようにすることを重視していると述べている。

2012年10月以降の観察では、先の不安定だった幼児達も、製作コーナーで保育者の作業モデルをまねておこなう姿もあったが、自身のイメージを様々な素材や道具を用いて具体化（製作）し、幼児同士で同調して遊ぶ姿もみられた。幼児達は、自ら製作コーナーでの遊びを展開できるようになってきている。ここでの担任保育者は、製作コーナーを離れることが以前より多くなり、各コーナーの幼児達に対し、遊びの志向に添いながら、発展を促すような援助をおこなっている。製作コーナーに戻ってきた際にも、各コーナーの遊びで必要とされるモノを製作する姿があった。これについて、担任保育者は、製作コーナーの幼児達が自ら製作（遊び）に取り組めるようになってきたことで、製作コーナーをベースにししながら、各コーナーの幼児達を見取り、さらにその遊びにかかわり、援助すること

がより可能になってきていると述べている。小川（2010）<sup>9)</sup>においても、保育者が製作コーナーでモデルをやめるタイミングは、幼児のつくる活動が活性化されることであり、そのことと保育者の各コーナーの遊びに対する診断と参加へのタイミングは、密接に関連していると論じている。

<表1> 記録①-1：2013年3月7日（木） 9：28～9：33

<p>9：28</p>	<p>①、〔積み木コーナー〕で、男児達の輪っか転がし（台）の援助をしている。          〔ままごとコーナー〕で、《P男》《V男》《N男》、綿（シャリに見立てている）をちぎるなどして、お寿司やさんの準備をしている。《P男》、材料を〔製作コーナー〕に取りに行き、戻ってお寿司を作る。《V男》も〔製作コーナー〕に行き、棚から材料を探し始める。《P男》、皿の上にお寿司（綿の上に切った色画用紙が載っている）を載せる。さらに、棚の上に3つつなげたティッシュ箱（回転寿司のレーン）を置き、その上にお寿司を2皿載せる。《I男》、コマを持って、〔ままごとコーナー〕の前に来て、《P男》達の様子を見ている。          〔積み木コーナー〕の①、立ち上がり、出入口の方へ向かう。その途中で〔ままごとコーナー〕の幼児達に「わあー、すごい、並んできた、お寿司が」と声をかける。① ①、登園してきた幼児達に「おはよう」と声をかける。          《V男》、〔ままごとコーナー〕に戻ってくる。《P男》、《N男》と《V男》に声をかける。《P男》、《N男》、《V男》、お寿司やさんの準備作業をそれぞれにおこなう。          ①、ボール紙と空き箱を持って、製作コーナーに戻り、座る。①、紙を折りながら、《J子》と話をしている。①、作業をしながら、〔製作コーナー〕から、〔ままごとコーナー〕の様子を見ている。          〔ままごとコーナー〕の《N男》が棚の前にイスを並べ始める。</p>	
<p>9：31</p>	<p>〔製作コーナー〕の①、作業をしながら、〔積み木コーナー〕、〔ままごとコーナー〕等の幼児達の様子を見ている。時々、近くの〔積み木コーナー〕で輪っか転がしをしている幼児達に声をかける。          〔ままごとコーナー〕の様子を見ていた2組（隣のクラス）の《イ子》が《N男》が並べたイスに座る。それに気づいた《P男》が、棚の上で、お寿司の載ったレーン（つなげたティッシュ箱）を動かす。それを見た《V男》が綿を持って近づき、《P男》に話しかける。《V男》、手に持った綿を頭に当て、頭を洗うふりをする。《V男》、テーブルのところに戻り、また、頭を洗うふりをする。          《P男》、《N男》、その様子を見て、指を指しながら何か話す。《P男》、棚の前に戻り、レーンをまた動かす。《イ子》、レーンが前になると、お寿司の皿を1枚取る。《イ子》、お寿司を食べるふりをする。《P男》、それを見ながら、レーンを動かす。《N男》、《P男》の横に来て、《P男》がレーンが動かすのをうれしそうに見ている。          《V男》、綿を頭の上に載せている。それを見て、《I男》が同じように頭の上に綿を載せ、お互いに見合っている。〔製作コーナー〕から〔ままごとコーナー〕の様子を見ていた①、作業をやめて立ち上がり、〔ままごとコーナー〕へ行く。</p>	

<表2> 記録①-2:2013年3月7日(木) 9:33~9:43

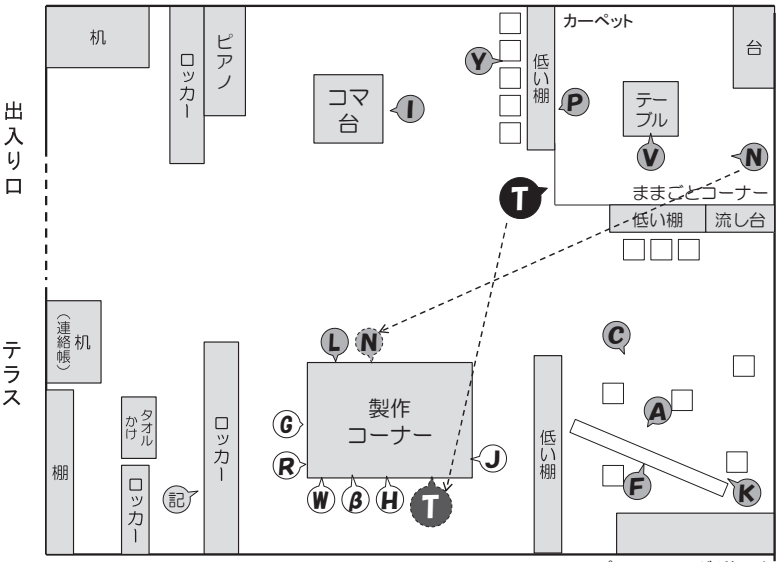
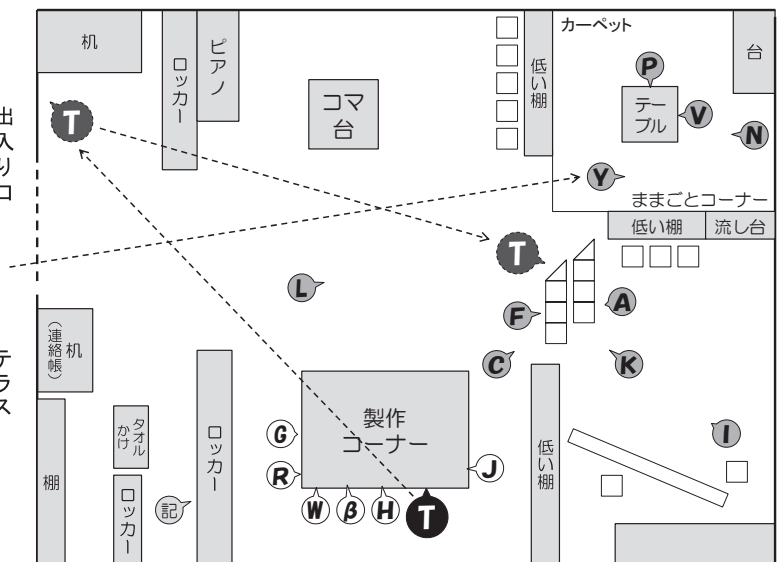
<p>9:33</p>	<p>①、[ままごとコーナー]に向かう途中、[積み木コーナー]の幼児達に、「わあー、いいコースができてきたなー」と話しかける。①、[ままごとコーナー]に着くと、綿を頭に載せたり、体をこすっている《V男》と《I男》に「ねえ、ねえ、それご飯でしょ。ご飯をなんで頭に載せたり、体をこすったりしてるの。そんなので食べたくないんですけど。」と言う。《V男》と《I男》、戸惑っている。② ①、[ままごとコーナー]のテーブルに座ると、《P男》がふり返り、①に「お客さんが来た、見てー」とうれしそうに言う。①、「わあー、ほんとだー」と応える。《P男》、また、お寿司のレーンを動かし始める。《V男》、それを見て、《P男》と一緒にレーンを動かす。</p> <p>①、テーブルの上に散らばった綿をボールに入れながら、「ご飯がいっぱい散らばっていますけど」と言う。③ さらに①、「私、マグロがいいなー、マグロ」と独り言のように言う。④ ①の様子を見ていた《I男》がボールから綿を取り出す。①、《I男》に「マグロとカッパ巻き、ありますか」と言う。⑤ 《I男》、《P男》達が動かしているレーンのお寿司を見に行く。</p> <p>①、カーペットの上に散らばっている食器を棚に入れ、整理したり、入口に散らばっている靴を並べ直し⑥ながら、「カッパ巻きはありませんか、カッパ巻き」と言う。⑦ ①、靴が整理が終わると、《P男》達を見て、[ままごとコーナー]を出て行く。①、[積み木コーナー]に行き、いざこざになっている幼児達の話聞く。</p>	
<p>9:37</p>	<p>[ままごとコーナー]の《V男》、綿をまるめ、それをを皿に載せ、レーンの上に置く。さらにまるめた綿を《I子》に渡す。《I子》、受け取り、食べるふりする。《P男》、立って見ていた《N男》に話をする。《N男》、テーブルに座り、お寿司を作り始める。登園してきた《Y男》が[ままごとコーナー]に来て、《P男》達の様子を見ている。《P男》、お寿司のレーンを動かす。棚の端まで来ると、レーンがバランスを崩し落ちてしまう。《P男》、落ちて散らばったお寿司と皿を拾う。《V男》と《I男》、その様子を見ている。《I子》、立ち上がり、保育室を出て行く。</p> <p>①、[積み木コーナー]で、いざこざのあった幼児達の話聞き終わると、[製作コーナー]に戻り、色画用紙で花を作っている。《X子》の前に材料をだし、テラスへ出て行く。</p> <p>①、向こう側のテラスで縄跳びをしている幼児達(《G子》《H子》《β子》と他クラスの女兒)の所へ行き、様子を見たり、話しかけたりする。さらに①、そこから少し離れたところで①と幼児達の様子を見ていた《R子》に気づき、近づいて話しかける。</p>	
<p>9:40</p>	<p>①、《R子》と昨日していた遊び(製作)の話しながら、保育室に戻ってくる。①、[製作コーナー]横のロッカー上に置いてある《R子》の製作物を取り、一緒に[製作コーナー]に座る。①、保育室内で遊んでいる幼児達の様子を一通り確認すると、色画用紙ではりせん状の花を作り始める。①、作業をしながら、[積み木コーナー]の輪っか転がしを見て、「すごい」と言う。①が花を作っていると、《Y男》が[製作コーナー]に来て、①の様子を見ている。①、「今度は緑にしよう」と言い、緑の色画用紙を取って、折り始める。《Y男》、棚から緑の画用紙を取り出す。①、《Y男》に「そこにイスを持ってきて・・・」と言う。《Y男》、イスを持って来て座る。</p> <p>[ままごとコーナー]では、《P男》が落ちていたお寿司と皿を拾い、棚の上に並べ始める。《V男》《N男》《I男》、遊び(作業)の具体的なイメージを持っていないのか、[ままごとコーナー]内でふらふらしている。</p> <p>テラスで縄跳びをしていた女兒4名が保育室に入ってくる。[製作コーナー]で作業をしていた①、それに気づき、女兒達に「おかえりー」と声をかける。[積み木コーナー]で、いざこざがおこり、①、その様子を見て、声をかける。さらに、①、[積み木コーナー]へ行き、幼児達の話聞く。</p>	



<表3> 記録①-3：2013年3月7日（木） 9：43～9：46

<p>9：43</p>	<p>①、〔積み木コーナー〕で《K男》と《F男》のいざごごの仲裁をしている。          〔ままごとコーナー〕の《P男》、改めてお寿司を作り、皿に載せている。《N男》、流し台の棚から鍋を出している。《I男》、鍋に綿を入れ、大きく振っている。《V男》、《I男》の様子を見ている。（それぞれが自分の思うままに行動している様子。）《P男》が、出来たお寿司の皿を、棚のレーン上に並べ始める。それを見た《V男》、《P男》の作っていたお寿司をレーンに並べ始める。          〔積み木コーナー〕では、幼児それぞれの言い分がエスカレートしてきたが、①は、それをなだめながら、聴き入れている。幼児達が少しずつ落ち着いて来る。①、立ち上がり、〔製作コーナー〕に戻る。</p>	
<p>9：46</p>	<p>①、〔製作コーナー〕に座り、色画用紙を折り始める。          〔ままごとコーナー〕に《U男》が来て、イスに座る。それに気づいた《P男》、《U男》の前でお寿司のレーンを動かし始める。その様子を《N男》が見ている。《P男》、〔ままごとコーナー〕のテーブルに行き、お寿司を盛んに作り始める。それを見て、《V男》も作り始める。《U男》、〔ままごとコーナー〕から離れる。          〔積み木コーナー〕で《K男》と《F男》のいざごごが再度始まる。①、作業をしながら、その様子を見ている。          《P男》、レーンに載ったお寿司を綺麗に並べ直す。さらに、〔ままごとコーナー〕の周りにあるイスを綺麗に並べ直す。《P男》、並べ終わると、レーンの前に戻り、①の方向を見て、レーンを指さしながら、「○○先生、見てー」と大声で叫ぶ。①、作業をしながら、《P男》の方を見て、「すごーい」と応える。すると、《N男》がお寿司のレーンを指さして、「こんなにいっぱい作りました。」と大声で叫ぶ。①、《N男》を見て、うなづく。⑧《P男》と《N男》、テーブルで改めてお寿司を作り始める。</p>	
<p>9：48</p>	<p>〔製作コーナー〕の①、はりせん状に折った色画用紙をひもで縫い合わせ、花の形にしている。          〔ままごとコーナー〕の《P男》、棚から皿を数枚とり出して並べ、さらにお寿司作りをする。《P男》、①の方を見る。そして、お寿司のレーンを動かしながら、①の方をちらちら見る。そして、「○○先生、……」と叫ぶ。それに続いて、《I男》が①の方に向かって何か叫ぶ。①、《P男》と《I男》の方を見て、ほほ笑む。⑨          〔積み木コーナー〕で《K男》と《F男》のいざごごが再度始まる。①、立ち上がり、〔積み木コーナー〕へ行って、2人と話す。          〔ままごとコーナー〕にいた《I男》、そこから出て、中央をふらふら歩きまわる。《P男》は、牛乳パックに入れていたちぎった綿をレーン上のお皿それぞれに置き始める。          〔積み木コーナー〕では、①と男児達がいざごご後の話し合いから、新たに輪っか転がしの台を作ることが提案される。①、話し合いがまとまってきたことを確認すると、コマ台の周りにちらばっていたコマや紐を整理し、その後〔ままごとコーナー〕へ向かう。</p>	

<表4> 記録①-4:2013年3月7日(木) 9:52~10:00

<p>9:52</p>	<p>①、[ままごとコーナー]へ行くと、その入口にあるマットと靴を整理しながら、レーンに載っているお寿司を見て、「わあー、おいしそう」と言う。①《P男》、うれしそうにレーンのお寿司を見ている。①、《P男》に「回転します?」と尋ねる。《P男》、「かいてん?」と言う。①、《P男》に近づき、レーンを指さしながら、「これが回転するんですか?」と尋ねる。《P男》、うなづく。② ①、紫のネタが載ったお寿司を指さして、「この紫は?」と尋ねる。《P男》、「ナス」と応える。①、「ナス・・・、ナスですかー、おいしそうー」と言う。③ ①、[ままごとコーナー]の様子を少し見て、[製作コーナー]に戻る。</p> <p>①、[製作コーナー]に座ると、作業を始める。 [ままごとコーナー]の《P男》と《V男》、またお寿司を作り始める。《N男》、[ままごとコーナー]を出て、[製作コーナー]に行く。[製作コーナー]に座ると、黄色の色画用紙を切り、お寿司のネタを作り始める。切り終わるとそれを重ねて持ち、[ままごとコーナー]へ戻っていく。</p>  <p style="text-align: right;">ブラフォーミング(積み木)</p>
<p>9:56</p>	<p>[ままごとコーナー]では、テーブルで《P男》と《V男》がお寿司のネタ(赤や黄色)を数枚お皿に入れている。[製作コーナー]から戻ってきた《N男》、作ったネタ(色画用紙)を手に持って、後ろから、《P男》と《V男》の様子を見ている。《N男》、レーンに近づき、その上に載ったお寿司を見て、自分の作ったネタを確認している。《N男》、レーンを動かす。保育室に戻ってきた《Y男》が[ままごとコーナー]に入ってくる。《P男》と《V男》の作業を見ている。</p> <p>[製作コーナー]の①、作業をしながら[積み木コーナー]で新たに輪っか転がしの台が積み上がっている様子を見ている。①、立ちあがり、入口付近に置いてあった段ボールを切る。切り終わると、それを[積み木コーナー]の《A男》に持っていき、渡す。</p> <p>[ままごとコーナー]の《P男》、①に「〇〇先生、見てー」と大声で言う。①、お寿司が並んだレーンを見て、驚いた身ぶりをしながら、「おいしそう、いつオープンかな〜」と言う。①、[ままごとコーナー]の様子を少し見て、[製作コーナー]に戻る。戻りながら「いつオープンかな〜」と独り言のように言う。④</p>  <p style="text-align: right;">ブラフォーミング(積み木)</p>

<表5> 記録①-6：2013年3月7日（木） 10：00～10：06

<p>10：00</p>	<p>①、〔製作コーナー〕に戻り、座ると、はりせん状の花作りを改めて始める。 〔ままごとコーナー〕の《P男》、綿をフライパンにいれ、料理のふりを始める。《V男》、お寿司作りをしている。〔ままごとコーナー〕の前に、新たな輪っか転がしの台が出来始める。《V男》、それが気になり、近くへ見に行く。《P男》も、〔ままごとコーナー〕から、その様子を見ている。《N男》、〔ままごとコーナー〕から出て行き、コマ台でコマを回し始める。《P男》と《V男》、テーブルに戻り、作業を再開する。 ①、作業をやめ、立ち上がり、輪っか転がし台の所へ行く。《K男》から、作業の見通しを聴く。〔ままごとコーナー〕にいた《Y男》が①のところへ来て、「□□時にできるんだって」と言う。①、「わかりました。楽しみにしています。」と応える。すると、すぐに《P男》も①のところにやってきて、「○○先生、長い針が1のところで・・・」と言う。①、「わかりました。楽しみにしています。」と応える。⑤ 《P男》が〔ままごとコーナー〕に戻ると、《H子》が《P男》のところへやってくる。《P男》、《H子》に「長い針が1になってからです」と言う。《H子》、時計を見て、〔ままごとコーナー〕の様子をじっと見ている。①、〔製作コーナー〕に戻り、座る。</p>	
--------------	---	--

<p>10：02</p>	<p>〔製作コーナー〕の①、色画用紙で花作りを改めて始める。10時の園バスで登園してきた幼児達が保育室に入ってくる。①、入って来た幼児達にそれぞれ「おはよう」と声をかける。《Q男》が、保育室に入ってくると、カバンを床に置き、①の所にかけよってくる。①、《Q男》に「おはようございます」と言う。《Q男》が上着を脱いで、床に置こうとしたので、①、ロッカーの方を指さして、「向こうに置いてきまーす」と言う。《K男》が「だめだって」と嫌がるので、①、《K男》を抱っこしてロッカーへ向かう。①、《K男》と上着や連絡帳の整理をする。 〔ままごとコーナー〕からその様子を見ていた《P男》が①の所にやって来て、①に「1になったよ、1になったから始まったー」と言う。①、「おっ、始まった〜？」と応える。⑥ 《P男》、〔ままごとコーナー〕へ戻っていく。①、登園してきた他の幼児達への対応をする。①、〔製作コーナー〕に戻り、座ると、〔ままごとコーナー〕の《P男》の方に向かって、「先生、銀行に行ってお金を降ろしてから行きます。高そうだから、お金を降ろしてから行きます。」と大きな声で言う。⑦</p>	
--------------	--	--

<表6> 記録①-7 : 2013年3月7日(木) 10:06~10:10

<p>10:06</p> <p>[製作コーナー]の①、色画用紙の花作りをしながら、同じように花作りをしている女兒達の援助をしている。 [ままごとコーナー]では、棚の前に《S男》、《O男》、《H男》、《N男》が集まってきて、《P男》が動かすお寿司のレーンをじっと見ている。《N男》がレーンを指さして、《S男》、《O男》、《H男》に何か話している。話終わると、《N男》、《O男》、《H男》、コマ台に行き、コマを回し始める。コマ台から、《R子》が《P男》の所に来て、お寿司のレーンをじっとみている。</p> <p>[積み木コーナー]で、《A男》と《Z男》のいざこざが始まる。①、立ち上がり、[積み木コーナー]へ行って、2人から話を聞く。《A男》と《Z男》が落ち着き、新しい輪っか転がしのレーン(ダンボール)作りが始まる。①、その様子をじっと見ている。[ままごとコーナー]から、《P男》が「〇〇先生、ここの△寿司、〇〇先生、ここ△△寿司」と叫ぶ。①、振り向いてうなづく。⑧①、[製作コーナー]に戻る。</p>	<p style="text-align: right;">プラットフォーム(積み木)</p>
<p>10:09</p> <p>①、[製作コーナー]に戻り、花作りを再開する。[製作コーナー]の女兒達も①と同じ花作りをしている。①、女兒達と話をしながら、作業をすすめている。</p> <p>[ままごとコーナー]では、《P男》がレーンと棚の上のお寿司を並べ直している。《V男》と《Y男》、[ままごとコーナー]の中で、ふらふら歩き始める。</p> <p>[積み木コーナー]の①、[ままごとコーナー]を見てから立ち上がり、[ままごとコーナー]へ向かう。[ままごとコーナー]に行くと、レーンの前に立っている《P男》に、「こんにちは、もう開店していますか」と言う。《P男》、「はい」と応える。後ろにいた《V男》もすぐにレーンの前に来て、「はい」と言う。①、「座る場所、どこでもいいですか」と尋ねる。《P男》、うなづく。①、レーンの前のイスに座る。⑨</p>	<p style="text-align: right;">プラットフォーム(積み木)</p>





◆3月7日の実践に対する聞き取り記録より(3月18日) ~ままごとコーナーの遊びに対する見取りと援助について~

観察者：ままごとコーナーでのお寿司やさんごっこについてですが。  
担任保育者：《P男》と《V男》が引き続きやっていて、最初は紙でご飯を表現していたのだが、それだとご飯に見え難かった。ペタペタ何重にもテープを貼っていたりしていることもあった。作り難さというのもあったので、綿や紙粘土をちょっとずつ出していったら、それをシャリに見立てるようになり、握りやすくなったみたいですね。  
観：ネタの種類もいくつかありましたね。  
保：エビとか、イクラとか、タマゴ、マグロなどもあった。  
観：今日は、10時過ぎくらいまで、お客さんはほとんどいなかった。《P男》が中心になっておこなっていましたが。  
保：《P男》が、この遊びを始めた頃は、お寿司やさんになって「何番の方どうぞ」と言って、作らずに、声だけでおこなうことが多かったが、キッズフェスティバル(2月)後から、自分で作ることに向かえるようになってきている。<sup>④</sup>  
観：これまでより、先生を呼ぶ回数も少なくなっているのでは。作ることに集中できるようになっているのでは。  
保：お寿司やさんが始まる(開店)と、お客さんがたくさん来るので、それまでにたくさんお寿司を増やして置いておこうとか、わさびを付けておこうとか、見えないところも自分達で考えて作っておこうとすることが少しずつできるようになってきた。<sup>⑤</sup>  
観：先生もそんなにここには入らずにいた。  
保：時計が分かってきて、「10時になってオープンです」とか言うようになり、それまで作り続けることが多くなってきて、ここでは作っているので、そんなにかかわらなくても。<sup>⑥</sup> ただ出来たらからお客さんを呼びに行こうという姿はまだなくて、部屋の中で「オープンですよー」と言っているのが多いが、お客さん(他児)が個々の遊びに向かっているとなかなか来なくて・・・。  
観：先生が、10時10分くらいにお寿司やさんに入ったタイミングやその意図は。  
保：お客さん(他児)が来ないので、出来ているけれど手が余っていて、まだお客さん(他児)が来る気配もなく、私が行くことで(他児も)来てくれるかなと思って。  
観：そろそろ作るだけではなく、作ったモノを用いてイメージのやり取りをするような遊びに変わっていく必要があるということですか。  
保：そうですね。無いものに気づくとか、「何で食べるんですか」と言って。また、「お醤油はないんですか。」とか言って。お客さんが来ることで、気づくこともあるので。<sup>④</sup>  
観：自分の世界だけではなく、相手にどうするかとなると、必要なものは何かとか、遊びのイメージが湧いてくいですかね。  
保：こちらが何か足りないのか、一言言ってあげると・・・。まずは、お寿司を作ることがメインになっているので。<sup>⑦</sup>  
観：お寿司のレーンも長くなってきていますか。  
保：最初は、3箱だったのですが、今はその3箱に空き箱をつけたりしている。ままごとコーナーの棚のサイズくらいになっている。  
観：たくさんのお寿司を並べられるようになっていきますね。ただ、動かしづらくなってきていませんか。  
保：その方が、ままごとコーナーの出入り口があるんですけど、それを越えて反対側の棚までレーンがいくようになってきている。落ちないように。この日(観察日)以降、そのように変化してきています。  
観：お寿司がまわるようなイメージがより具体的になってきていますね。  
保：はい。

### 3) 考察(記録①より)

#### ①製作コーナーからの見取りとままごとコーナーへのかかわりについて

本記録において、担任保育者は、製作コーナーをベースに、そこで作業をしながら、各コーナーでの幼児達の遊びの状態を見取り、必要な際にかかわり、援助をおこなっている。その中でもままごとコーナーで主に3名の幼児達によって展開されたお寿司やさんごっこに対する見取り(遊びへの理解や援助の構想)やかかわりについては、以下のことが考えられた。

まずは、仲間と遊びの目的（お寿司やさんを開く）を共有しつつある幼児達の一部が、この遊びのイメージやその展開とは違う行動をしている（記録①-1、7の網掛け部分）と理解された際に、保育者は製作コーナーから離れ、ままごとコーナーに行き幼児にかかわっている。本記録では、それまでお寿司のシャリに見立てていた綿を頭や身体にあててこするような行動をした際に、保育者は遊びの展開の中で綿がシャリに見立てられていたことを伝え、言葉がけによって見立ての確認（下線②）をおこなっている。また、幼児達が作っていないお寿司のネタを提案するなど、この遊びを改めてイメージさせる言葉がけをおこなっている（下線④⑤⑦）。さらに、その場にはいるが、歩きまわるなど、遊びのイメージが散漫になっているような行動をしている際には、保育者がお客さんになることによって、その必要性から、幼児がこの遊びの展開に応じた行動をするようなかかわりをおこなっている（下線⑯⑳）。一方で、保育者はままごとコーナーにかかわった際に、使われていない食器を片づけたり、散らばっている靴を並べ直すなど（下線③⑥⑩）、環境の再構成をおこなっている。これも幼児達が遊びのイメージを継続できるような援助となっている。

これらの援助に共通することは、このお寿司やさんごっこに参加している幼児達が遊びの目的やイメージを改めて皆で共有できるよう適時に働きかけていることである。このような援助の前提になるのが、製作コーナーから、常にそれぞれの遊びの状態を見取っていることが考えられる。4歳児クラスの幼児は、遊びの中で、徐々に先の見通しやイメージを共有して遊びを展開していくようになるが、時として、その見通しに向けた遊びを継続できなくなったり、イメージが散漫になってしまうことがしばしば見受けられる。このような状況においては、新たな遊びの広がりや展開の可能性も考えられるが、幼児達はそのイメージに添う遊びの展開や発展に戸惑っている状況があるとするならば、幼児達のイメージに添った遊びの展開に必要な援助を保育者が構想し、実際のかかわりを通して援助することが必要と考える。

## ②製作コーナー等（離れた場）からの援助について

一方で、製作コーナーやその周辺にいた保育者に、ままごとコーナーでお寿司屋さんを展開する幼児が声をかけてきても、それへの応答はあったが、ままごとコーナーに行きかかわることをあえてしない場面も多々あった（下線⑧⑨⑭⑮⑯⑰⑱）。これについては、ままごとコーナー以外の他児の見取りや援助の必要があったことも考えられるが、ままごとコーナーの幼児達のお寿司やさんに向けてお寿司を作ることが継続され、このごっこ遊びの展開に向けた準備がなされていると見取った上で、見守っていたことが考えられる（波線㉑）。さらに、4歳児クラスの育ちとして、作る活動のなかで、自ら考えて作り出していける見通し（波線㉒㉓）やそのようになってほしいとの意図もあったことが考えられる。4歳児クラスのごっこ遊びにおいて、その遊びに参加する幼児達が何らかのお店を開くためにその商品（アクセサリ、ピザ、ラーメンなど）を素材を用いて何個も作り続ける場面を見ることがあるが、この継続して作る活動は、幼児達がどこかの時点でお店を開店し、多くのお客さんに対応することを見通しておこなっている活動と考えられる。つまり、この様な継続して展開される作る活動は仲間との目的志向的な遊びの表れとなっているのである。

実際の集団保育の遊び場面では、保育者は幼児から求められても、それに応じて直ぐにはかかわれない状況はよくある。つまり、集団保育でのそれぞれの遊びへの援助には、保育者はその優先順位を





## 註および引用文献

- (1) 中山昌樹・小川博久編著 (2011) 遊び保育の実践. ななみ書房
- (2) 本研究の対象園である認定こども園A幼稚園では、2歳児保育および3歳児保育において、保育者と幼児とのかかわりを基盤として、クラスの幼児同士が遊びを通してかかわり合いをもてるようになることを重視して、製作コーナーを基盤にした遊び保育を実践している。  
高橋健介・中山昌樹・中田幸子・猪越恵美 (2013) 2歳児保育の遊びにおける製作コーナーの意義について - 保育者と幼児との同調関係と“見る-見られる”関係の構築-. ライフデザイン学研究. 第8号. 東洋大学ライフデザイン学部. 145 - 160
- (3) 高橋健介・中山昌樹・中田幸子・猪越恵美 (2014) 製作コーナーを基盤とした3歳児保育の意義とその実践 - 同調的動作共有による集団形成と遊びの展開 -. ライフデザイン学研究. 第9号. 東洋大学ライフデザイン学部. 269-284
- (4) 無藤隆 (2011) 保育の学校1 保育基本と学ぶ編. フレーベル館
- (5) 友定啓子 (2012) 学び合いを可能にする協同性の育ち. 初等教育資料. 第890号. 94 - 97
- (6) 中坪史典・岡花祈一郎・古賀琢也 (2010) 幼児同士の協同遊びを育む保育者の実践的思考. 中国四国教育学会 教育学研究ジャーナル. 第6号. 31-39
- (7) 岩田遵子 (2011) 保育実践をフィールドとするエスノグラフィーとは何か. 子ども社会研究. 17号. 134
- (8) 小川博久 (2013) 保育者養成論. 萌文書林. 274-275
- (9) 小川博久 (2010) 遊び保育論. 萌文書林. 140-141

## 謝辞

本研究をおこなうにあたって、認定こども園あかみ幼稚園4歳児クラス主任（当時）館野ひろみ先生、4歳児クラス担任（当時）荻原万里子先生をはじめ、認定こども園あかみ幼稚園の先生方より、多大なるご支援とご協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

Meaning of Early Childhood Education and Care  
to Have Thought Much of the Making Corner in the 4-Year-Old Class  
—Guidance for Development of Purposeful Play from Sympathetic Play—

Kensuke Takahashi, Masaki Nakayama, Sachiko Nakada, Megumi Inokoshi

The 4-year-old class is the object of this study, has been with the practice challenges that will continue to develop into a sympathetic play or purposeful play. The meaning of making corner and the support for child about playtime reviewed by analyzing the observed document of the practice to have thought much of the making corner in the 4-year-old class. As a result, the teacher will understand the play status of each location in the making corner to understand considering the timing of guidance. When the purpose and images of children's play has become ambiguous, the teacher talk about play purpose and play image, it was understood that it has been confirmed purpose and images of children's play. By that, it was thought that the purposeful play with peers will continue to develop.

**Keywords:** making corner, practice of education and care in 4-year-old class, sympathetic play, purposeful play